

別冊 VOL.1

ほーるめいと

edit: DEE INC. / text: REI KUMAI / photo: YASUHIRO SAWAO

記憶と未来が神戸で拡張する表現の現在地

やなぎみわ
小野寺修二

神戸出身の現代美術家・演出家のやなぎみわと、2月に神戸で新作を上演する演出家・振付家の小野寺修二。全く別々の道を行ってきた2人だが、興味のベクトルは意外にも重なる点が多い。2人は、神戸について、またクリエイションに対してどんな思いを持っているのか、神戸で初対面が実現した。

美術・マイムという
各々のフィールドを超えて
触れた演劇の世界
二つの才能が拡張し、
表現はさらに深層へ

—やなぎさんは神戸ご出身、小野寺さんは以前からたびたび神戸でクリエイションをされています。お二人の神戸に対する印象は？

小野寺 新開地が好きなんです。10年前くらいに神戸アートビレッジセンターKAVC（現：新開地アートひろば）でワークショップをやったり、作品を作ったりさせて頂いたのですが、ポートピアの隣にオシャレな神戸の街並みがあって、そのギャップにちょっとびっくりして（笑）。

やなぎ 私は新開地に近い兵庫津の出身ですから、三宮とはカルチャーが違うし、今でも神戸のおしゃれな「山の手」は緊張しますよ（笑）。高校時代は元町にある画塾に通い、高架下商店街が好きでした。

—お二人は今回、初対面です。

やなぎ 以前、小野寺さんの舞台を拝見したことがあるのですが、演者さんの動きがすごく厳密に、歯車のようにきっちり噛み合っていて、ロシアアバンギャルド的な美学を感じました。だから小野寺さんは厳しい人かなと思ってドキドキしていたのですが……。

小野寺 実は僕も緊張していました（笑）！ちゃんとテーマを持ってお客さんと向き合えるアーティストにめちゃくちゃ憧れがあるので、やなぎさんの創作スタンスはすごいなと思っていました。

—お二人は現代美術、パントマイムをそれぞれの活動の起点として、やなぎさんは2010年から、小野寺さんはフランス留学から帰国後の2007年以降に、演劇との距離が近づき、領域横断する活動を展開し始めました。何かきっかけがあったのでしょうか？

小野寺 僕は以前やっていた団体（水と油）が休止して、2008年にカンパニーデラシネラを始めたのですが、その頃バレンダサーの首藤康之さんに「一緒に何か作りませんか」とお声がけいただいて「空白に落ちた男」という作品を作りました。首藤さんが「小野寺さんの演劇的な部分を楽しましにしている」と言ってくだったので、そこが起点となったんです。また同じ頃、俳優・演出家の白井晃さんの作品でステージングの仕事を担当して、それを機にいろいろな演出家の方とお会いでき、演劇に興味を持つようになりました。

やなぎ 私は2009年にヴェネチアビエンナーレに行ったことが大きなきっかけだったかもしれません。現代美術は基本的にヨーロッパ主義なので、ビエンナーレに参加して思うところがあり、一度美術を外れて演劇をやってみようと思ったんです。ただ、やはり以上は近代演劇の成り立ちから学ばねば！と思い、築地小劇場に触れた「1924」シリーズを上演したところ、蛭川幸雄さんが観に来てくださって、「僕たち演劇人ではなかなか触れられないところに触れているね」と。演劇は人が繋いできた文化なんだと感じました。

やなぎ みわ

神戸市生まれ。女性をテーマにした写真作品で個展多数。2009年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館で個展。2010年より舞台作品を創作し美術館と劇場で上演。「ゼロアワー」で北米ツアー。2016年より台湾製の特等車両による野外巡礼劇「日輪の翼」を開始。21年に日台共同制作で台湾オペラの演出も手掛けた。2025年は六甲ミーツ・アートにて水上劇「大蛇百合」、歌舞伎可能舞台にて「黄泉平坂 排斥と遊戯」を上演。

小野寺 修二

演出家。カンパニーデラシネラ主宰。日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。1995年～2006年、パフォーマンスシアター水と油にて活動。文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として1年間フランスに滞在。帰国後、カンパニーデラシネラを立ち上げる。マイムの動きをベースとした独自の演出で世を超えた注目を集めている。第18回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。演出を手掛けた舞台公演「流々転々 KOBE 1942-1946」が、2026年2月に神戸文化ホールで上演される。（公演情報は裏面へ）。



立ち上がっては消えてゆく、「音」という表現の可能性 深まる、空間と音に対する探究

お二人はジャンルのボーダーを越える一方で、ポータビリティの高い作品や野外劇にも取り組まれている。さらに音に強い関心を持っている。音に共通点を感じる。やなぎ 美術は、白い壁にかかった作品と鑑賞者が向き合っている。歴史があります。美術は白い壁で鑑賞できないもので、作品を冷やして永久保存しますが、劇場という黒い箱は常に演者スタッフが入り替わり立ち替わり、熱く流動していきす。それに憧れを感じて、ブラックボックスでも公演しましたが、最近の劇場は機構がハイスペックすぎて、作品が守られていると同時に、やなぎさん、感覚になってしまふ。野外劇を始めた理由のひとつです。

神戸市中央卸売市場ではステーションレーラーを使った日輪の翼「六甲山では音楽、ダンス、語り、念仏を交えた野外パフォーマンス」大蛇百合を上演されました。やなぎ 公演中も魚市場は稼働し続けるし、海や山は雨風にさらされる。劇場外の公演は、イレギュラーな出来事や連続で、毎回入場者を集めて天候を待つ。一息持たず、空を飛ぶ、美しい音や景色も残るけど、空気が重く感じることがあります。

「新しいこと」を受け入れて形を変えながら育まれてきたまち神戸の現在を見る

—“現在の神戸”についてはどんな印象をお持ちですか？
やなぎ 長年、神戸を離れていたのですが、親の介護のため2015年くらいから帰ってくるようになりました。母がおしゃべりな人で、戦前戦中の神戸の記憶をよく話してくれました。終戦の秋に海まで見渡す限りの焼け野原にコスモスが咲いている風景、戦争が生んだ格差、米軍相手の慰安施設があったこと、それでも子供心に米軍の将校たちがカッコよく見えたとか……今の神戸の街を見ても、母から渡されたそういう記憶が常にオーバーラップします。暗い時代を見てきた母だから「夢の世界」の宝塚歌劇が大好きでした。

—小野寺さんは神戸文化ホール 開館50周年記念事業として、2026年2月に新作舞台「流々転々 KOBE 1942-1946」を上演されます。神戸ゆかりの作家・西条三鬼の「神戸・続神戸」をベースに、第二次世界大戦下、神戸のホテルに集うクセのある人たちが描かれます。創作にあたって、上演台本を手掛ける山口茜さんと、神戸のリサーチをされたそうですね。

小野寺 はい。リサーチの中で、神戸の歴史を教えてくださいました。地元の人が、「壊れて、また立ち上がることを繰り返しながら、新しいことを受け入れてきた街ですよ」とお話し下さって、なるほどなど。いろいろの人が入ってきて、さまざまな状況変化を受け入れながらも懸命に生きてきたところが、神戸の魅力なのかもしれない、と思いました。とはいえ、神戸ということの特筆するのではなく、また「だから神戸っていいよね」というようなまとめ方をするのは、いろいろな見方の可能性がある作品にしたい。ある出来事や裏側にある状況とか事実を、想像力によって感じてもらえるような作品にできたらと思っています。

「1924」シリーズ | 1924年に創設された日本初の近代劇場・築地小劇場を巡る、やなぎみわ原案・演出・美術による3部作。2011年から2012年にかけて全国をツアーした。

「日輪の翼」 | 1984年に中上健次が発表した長編小説を原作に、ステージレーラーを用いた舞台作品。2016年から2019年にかけて全国をツアーした。

「大蛇百合」 | 2025年に発表された、旅情と大蛇百合の精の出会いを描く、やなぎみわの舞台作品。踊り子、語り部、ボールダンサー、誦念仏僧など多様なメンバーにより幻想的な作品世界が繰り広げられた。

「人魚姫」 | 「瀬戸内国際芸術祭2013」で上演された、山口茜がテキスト、小野寺修二が演出を手がけ、南果歩が主演した作品。春・夏・秋の3期にわたり、瀬戸内の島々で上演された。

「風が丘」 | 「東京芸術祭2022」の1プログラムとして、東京の池袋駅前GLOBAL RING THEATRE（池袋西公園野外劇場）にて上演された小野寺修二演出による野外劇。

撮影協力 MOKUBA'S TAVERN（木馬） トアロード沿いに佇む、1977年創業の神戸を代表する老舗ジャズ喫茶。地元の常連客をはじめ、ミュージシャンや映画監督など、多方面の文化人からも愛され続けている。神戸市中央区北長狭通3-12-14



